

# おとぎ草子の歴史とその変化

竹内亮 吉井大晟 檀野太一

## 1. はじめに

### 研究の動機

古典文学を研究するにあたって、おとぎ草子に興味を持ち調べることとなった。調べる過程で昔と今の話の内容には違いがあることを知り、「現代と昔では話の内容にはどのような違いがあるのか」というテーマで研究した。

## 2. 研究過程

- (1) 3人それぞれどの物語について研究するのか決める。
- (2) それぞれの物語の歴史や昔との違いに重点を置きながら調べる。
- (3) 3つの物語の昔と今の違いの共通性を考察した。

## 3. それぞれの物語の内容

- (1) 浦島太郎
- (2) 一寸法師
- (3) かちかち山

### (1) 浦島太郎

浦島太郎の出典は「日本書紀」、「丹後国風土記」、「万葉集」がありそれぞれ話の内容は現代のものとは違い、「日本書紀」は浦島太郎が仏衆に会う、「丹後国風土記」は基本的な話は同じだが亀が美しい女に変わるという点や老人に変化した後乙姫と歌を交わしあう点が異なり、「万葉集」には亀が登場しない。

これらの特徴として動物報恩という人から恩を受けた動物が恩返しとして幸福や名声を報いるというモチーフがないという点や、道教の仙人の存在を信じ自ら仙人になろうとする神仙思想を濃厚に反映している点があり、現代との違いは、使われる語句が違い例としては浦島太郎が浦島子、蓬莱山が竜宮城、玉手箱は玉匣となっていて物語の結末は浦島子が風雲とともに天に飛び去るという形をとっている。

次に浦島太郎の起源だが最も有力な説は中国が起源だという説だが日本の平安貴族の伊預部馬養の創作という説や漁師が漂流して帰還した体験をもとにしているという説もある。だが朝鮮、台湾、チベットなどの東アジアや東南アジア諸国に話は分布しており、起源ははっきりしていない。

次に浦島太郎の歴史に伴う変化についてだが、時代ごとに特徴があり、平安時代には「浦島子伝」「続浦島子伝」や院政期の歌学書に引用されており、悲恋を主題にしたものが多く、

中国文学を背景にした表現が用いられ神仙思想は薄れている。室町時代には御伽草子に話が掲載され、動物報恩の発端が登場し話の結末は浦島太郎が鶴となり丹後国浦島明神に祀られる内容に変化し、また、この頃から浦島に「太郎」の名がつき竜宮城の名称が用いられるようになる。江戸時代には「浦島年代記」という子供向けに出版される赤本に掲載されこの時から内容は現代のものに変容し童話化が進んだ。

最後に浦島太郎の現代だが今では昔話として全国に分布するが地域により話に微妙な違いがみられる。また、現代まで語り続けられてきた理由は、異教訪問、異類結婚、動物報恩、老いへの恐れ、禁忌の犯しといった要素の複合や人間の負う根源的な時間と空間の認識の伏在とそこから生まれる喪失感だとされる。

## (2) 一寸法師

平安時代から室町時代にかけて成立。住吉神社や清水寺など日本の神社と寺が登場するため日本で成立したと考えられる。作者は不明。

内容の変化について（原本をもとに現代語訳された書物を「昔」、絵本や小説などの書物を「現代」として比較した。）：

- ① 一寸法師が生まれる場面について、現代ではおじいさんとおばあさんがおてんとうさまや神社（詳細には書かれていない）にお祈りをささげ、一寸法師を授かる。また、この時のおじいさんとおばあさんの歳は明らかでない。昔ではおてんとうさまや神社という抽象的な表現でなくほとんどの書物に住吉神社とかかれてあった。また、おじいさんとおばあさんの歳は40歳ほどである。
- ② 一寸法師が出ていく場面について、現代ではおじいさんとおばあさんが一寸法師を心配しながら送り出すが、昔の方では一寸法師を恥だと思って追い出す形になっている。
- ③ 昔の方では、一寸法師が三条の宰相という大臣の家来になり、娘をもらうためにずる賢い策略を練るといった描写がみられるが、現代のほうでは、大臣の名前がなく、むしろ勇敢で誠実な性格である。

結論：昔より現代の方が漢字表記が圧倒的に少なく、また地名や人物名が省略されている。過激な表現や展開、言動も避けられており、登場人物の性格もかなり違っている。これらの事から、主に子供向けの教育を目的とした内容に変わっていったことがわかる。

## (3) かちかち山

成立は室町時代後期から末期にかけて。物語の特徴としては、勧善懲悪をテーマにストーリーが構成されている。

また、現代と昔の話の内容は、作中の登場人物の大きな言動の違いや、残虐性などの点で変化があげられる。

作品ができた室町末期のカチカチ山はとても残酷な内容であり、タヌキの性格が非常に狡猾である。だが、時代を経るにつれ内容はどんどん緩和されていった。こうした内容の変化、緩和はその時代の背景に影響を与えられていることが多い。

時代の流れに伴う主な変化として、まず江戸時代後期にはタヌキに対するお仕置きの方法などの変更や、お仕置き自体をなくすなどといった編集が行われた。これはあくまでもタヌキを悪とし、お仕置きを受けるタヌキに同情するのを防ぐためである。また、昭和末期頃には小さい子供が読むようになったため内容の緩和が行われた。

このように残酷な表現や内容は改変や省略などが行われることによって、幼い子供たちにも読み聞かせができるようになっていったことは、幅広い人々に昔の作品に興味をもってもらうことに関して非常に効果的であるが、同時に現代の日本にはカチカチ山の本当の話を知る人は次第に少なくなっていってしまっているのもまた事実である。

#### **4. 考察**

どの作品も宗教や文学、当時の人々の暮らしなどといった時代背景をもとにしている内容や表現に変化していき、江戸時代はまさにその時代背景による変化の大きな分岐点となったと言えるであろう。読者が大人から子供へと変わることによって内容の変化や緩和などが大きく行われた。しかし、作品ごとに存在するメッセージ性は時がたっても変わることはなかった。

#### **5. 参考文献ならびに参考 Web ページ**

「日本架空伝説人名事典」「日本伝記伝説大事典」